
不完全なヴァンパイアと魔導書の少女

すちーるうーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不完全なヴァンパイアと魔導書の少女

【Nコード】

N4476X

【作者名】

すちーるうーる

【あらすじ】

魔法が存在し魔物、竜、天使、悪魔、精霊などももれなく存在する世界『アスタナシア』

この世界では魔物から人々を守る《狩人》を育成する学園がある
王都にあるアルテミス学園もその1つだ

そしてその学園の【忘却の図書館】で主人公が出会ったのは『鴉の翼』という魔導書だった

主人公は途中から最強になりますよ？

プロローグ：少年の眩き

こんな夢を見た

自分の姿をした自分ではない自分が大量の屍が積み上げられた山の上で恍惚の表情で世界を見下ろす

そんな夢だ

自分の姿をした自分ではない自分は宝石のような紅い眼をしていて元は綺麗だったであろう銀色の髪を赤い血で染めていた

そして自分の姿をした自分ではない自分はその紅い眼をこっちに向けてこう言うのだ

「私を受け入れろ」と

「……………ハア……………」

少年は寝ていたベッドからむくりと起き上がると幸せが逃げていくようなため息を吐いた

少年の名はクーファス・ツヴァルト

アルテミス学園1年7組所属の15歳だ

肩にかかるくらいに伸ばしたどこか神秘的な雰囲気漂わせる髪は白く、整った顔の目の色は右目が黒で左目は紅い

そんな女性の10人中10人がイケメンと言っただろう整った顔を持つ少年はどこか苦しそうな顔でこう呟いた

「あー、血が飲みたい」

アルテミス学園、輩出の森にて

アルテミス学園

生徒数3000人ほどの《狩人》を育成する学園だ

《狩人》とは魔物の討伐を生業とする者達のことだ

ここ南大陸の王都ウルスの少し離れた場所の森

『輩出の森』の中央に建てられたアルテミス学園は《狩人》輩出の名門と言える由緒ある学園である

「あー面倒くさい」

『輩出の森』の入り口に覇気のない白髪の少年が立っていた

少年はグレーがベースのブレザー、チエックの入ったストラックスを身に纏っていた

少年 クーフアス・ツヴァルトは妖しさを放つ紅い瞳をアルテミス学園がある方角に向け

「マジ面倒くさい」と言つて『輩出の森』に入つていった

クーフアスは歩くのが面倒くさいと言つたんじゃない、ましてや彼が今日からこのアルテミス学園1年7組に転入することを言つたんじゃない

クーフアスの向かう方角の1?先に何か大きな力が目覚めようとしていることに対して彼は「面倒くさい」と呟いたのである整った顔の目の色は右目が黒で左目は紅い

そんな女性の10人中10人がイケメンと言つたろう整った顔を持つ少年はどこか苦しそうな顔でこう呟いた

「あー、血が飲みたい」アルテミス学園

生徒数3000人ほどの《狩人》を育成する学園だ

《狩人》とは魔物の討伐を生業とする者達のことだ

ここ南大陸の王都ウルスの少し離れた場所の森

『輩出の森』の中央に建てられたアルテミス学園は《狩人》輩出の名門と言える由緒ある学園である

「あー面倒くさい」

『輩出の森』の入り口に覇気のない白髪の少年が立っていた

少年はグレーがベースのブレザー、チェックの入ったストラックスを身に纏っていた

少年 クーフアス・ツヴァルトは妖しさを放つ紅い瞳をアルテミス学園がある方角に向け

「マジ面倒くさい」と言っつて『輩出の森』に入っつていった

クーフアスは歩くのが面倒くさいと言っつたんじゃない、ましてや彼が今日からこのアルテミス学園1年7組に転入することを言っつたんじゃない

クーフアスの向かう方角の1？先に何か大きな力が目覚めようとしていることに対して彼は「面倒くさい」と呟いたのである

魔導書の覚醒め

「やばいな、確実に禁書だし使用危険度は余裕でS越えてんな」
クーフエスはため息を漏らしながら本日三回目になる「面倒くさい」
を呟いた

アルテミス学園領『輩出の森』の入り口から1？先に強大な力を感じてから彼はどう対処するか悩んでいた

「早く学園行かんとあいつに怒られるし、かといって禁書を野放しするのも後々面倒だしなあ」

禁書というのは閲覧禁止と指定されている魔導書である

魔導書には7つの属性がある火、水、風、雷、土、光、闇だ

光と闇を除いた5つの魔導書が一般的に知られている魔導書だ

しかし光や闇の魔導書は別格で光の魔導書は神殿や協会本部など限られた場所にしか置かれない

闇の魔導書に至っては一般的に知られてすらいない

闇の魔導書は禁書に指定され厳重に管理されている

しかしごく稀に『覚醒める』ことがある

それが今まさにクーフエスの前で起きている事態なのだ

つまりアルテミス学園で管理されている闇の魔導書が覚醒めようとしているという軽く災害のような事態が起きている

過去に闇の魔導書の『覚醒』によって都市1つが壊滅したという記録がある壊滅の理由は魔導書の内容に左右される

つまり魔導書に記された内容が、目の前の相手を殺すくだったとしよう

すると魔導書の力に侵された人々は目の前にいるのが全く知らない相手でも最愛の人でも容赦なく殺すだろう

ここまで言えば解るだろう闇の魔導書の恐ろしさを

しかしクーフエスは乗り気ではない

なぜなら自分1人ではこの事件を解決するのは難しいと分かっているからだしかし一か八かでもやらないといけない状況なのも分かっている

「しゃーないな…まあ今の俺が魔導書の封印が出来る確率は5割弱だろうがやらなきゃいけないよなあ」

とクーフエスがぶつぶつと呟いていると魔導書を封印している建物に辿り着いた

その建物の名前は

「『忘却の図書館』　ね、成程封印には持ってこいだな」

そう呟く少年は災害に立ち向かうには場違いな楽しそうな表情を浮かべていた

『忘却の図書館』の扉

「さくで、いつちよ気張りますかね〜」

クーファスは『忘却の図書館』の扉に手をかけた

「ふむふむ、一定量の魔力を流し込まないと開かないカラクリか…」

扉を開ける仕組みが解ったクーファスはせ〜のという掛け声と同時に

「うりゃああああああああああああ！！」

適当に流し込んだ

その魔力量は一級魔導師10人に匹敵する量だった

一級魔導師の総魔力量はだいたい500ほどつまりクーファスは5000ほどの魔力を適当にしかも軽く流し込んだのである

ガシャン！

「おっ！開いた開いた〜っと」

桁外れという規格外の魔力を流し込んだはずなのに全く疲労が見えない

普通だったら急性魔力枯渇症になるだろう

そんなことは気にもせずバンバン流し込んだのであるこの少年は

「~~~~~」

扉を開けたクーファスは鼻唄を陽気に口ずさみながら中に入っていた

やはり少年の顔には恐怖の色が見えずどちらかと言つとサンタを待ちわびている子供のようだ

「さてさて、と」

クーファスは『忘却の図書館』に入ると中を見渡した

「やっぱり禁書の位置はまるわかりだな」

といいながら一番奥の部屋に入ろうとした

「グウウアアアアアアアアア」

「わーお」

周囲に重力をかけるかのような咆哮が響いた

「マンティコア…ランクはAA>ダブルエー<か…」

体躯はライオン、顔は人面、尻尾はサソリの尾の化け物

Aランクの《狩人》が5人がかりで討伐する魔物がクーファスの前に立ち塞がった

マンティコアとの戦い

前回までのあらすじ！

災害級の闇の魔導書が今覚醒めようとしていた！魔導書を封印しようとうと向かうクーファス！しかしクーファスの前にマンティコアが現れた！

マンティコアはランクA Aの魔物でランクAの《狩人》が5人がかりで討伐する強敵なのだ
以上前回のあらすじでした

「グウアアアアアア！」

「うっさい！黙れ！人がせつかく現実逃避してんのによぉ！」

今クーファスの前には全長3mほどのマンティコアがいる

「番犬ならぬ番マンティコアってわけか…あいつも面倒くさいもん置きやがって…だいたいマンティコアのマンティってなんだよ…：：：パ
ンティの親戚？やだ興奮してきた」

まだ現実逃避をしているクーファスに構わずマンティコアはその巨大な右足を振りかざしてきた

「ガアアアアアアア！」

「おっと！危ないな！」

クーファスはマンティコアの右足を紙一重でかわしさらに後ろに跳んで距離をとった

「よし、真面目にやるかな…術式展開！火の7>楽炎<！」
クーファスは右手を前にかざし術式という魔方陣を展開し火の7>楽炎<を発動した

属性には強さが10段階あり1段階上がることにより威力が上がっていく
クーファスが使用した火の7は火属性の7段階目の魔法の1つである
クーファスが発動した>楽炎<はマンティコアに直撃し、>楽炎<
はマンティコアに絡み付いた

「熱いだろ？>楽炎<は相手を縛る炎の鎖だからな。もうお前は動けないぜ？魔導書封印したら解除してやるから大人しく待って……！」

クーファスの言葉は最後まで紡がれなかった
なぜならマンティコアのサソリのような尾がクーファスの腹部を貫通したからだ

（くそ！尾は最初に切断するべきだったな……！）

焼けるような激痛

耐えきれずクーファスは倒れた

不完全なヴァンパイア

腹部に突き刺さる鋭いサソリの尾
焼けるような激痛

「くっそ……！」

激痛に顔を歪めながらクーファスは倒れた

術者がかけた魔法は術者が死ねば解ける
しかしマンティコアを縛り付ける「楽炎」は解けていないそれはす
なわち

「あ〜〜やっと治った」

マンティコアは驚愕していた
普通なら確実に死んでいる
もし助かったとしても尾に塗られた毒が回復魔法を拒絶し、回復出
来ずに出血多量で死んでいるはずだ

なのに目の前の少年は生きている

「はっはー、どうして俺が生きてるか不思議でならないんだろ？教
えてやるよ。それは俺がヴァンパイアだからだ」

正確にはクーファスはヴァンパイアではない
ヴァンパイアと人間のハーフのダンピールだ

しかしヴァンパイアである父の力を色濃く受け継いだため圧倒的な再生力と魔力を持っている
元々ダンピールはヴァンパイアほど力も強くないし特殊能力も持たない

その代わりにヴァンパイアの持つ弱点が失くなるそしてダンピールは死ぬとヴァンパイアになれる、いやなってしまう

しかし圧倒的な再生力と魔力のせいで長命で死なないクーファスはヴァンパイアになれない

さながら『不完全なヴァンパイア』だ

「さてさて、お仕置きの時間だな」

ニタアと意地の悪い笑みをマンティコアに向けゆっくりと近づく

身の危険を感じたマンティコアは尾をクーファスに突き出した
しかし

「不意打ちだから効くってお前が一番解ってるだろ！水の6＞水鎌
く！」

刹那、『忘却の図書館』にマンティコアの断末魔が響いた

「ふう…ってやべっ！時間食っちゃった！」

クーファスは慌てながら禁書の保管庫の扉に手をかけた

ダレカノササヤキ

ここは何処だろう？

暗い空間、何も無い空間、光が差し込まない空間

目を閉じているのか

闇の中なのか分からない

ただ1つ分かるのは…

寂しい…

クーファスは扉に手をかけた

ゴウッ！

「あっ…やべえこれもう手遅れだわ…」

視覚できる濃密な闇の魔力
その量は一般人なら昏睡するレベルだ

「やっぱマンティコアに時間かけすぎたなあ……どうすっかなあ……
……んー、あまり気乗りしないけどー大事だしなあ……やるしかないか
……」

クーファスは両手を魔導書にかざし

「術式展開光の10>聖光<」
を唱えた

この魔法は光の最高クラスの魔法で天使にしか使えない浄化の魔法だ
なぜクーファスが使えるのかと言うと……いやこの話はまた今度にし
よう

闇の魔導書に思い切り浄化魔法>聖光<を繰り出す

するとどうだろう視覚出来きるほどの濃密な魔力が薄れていく

「……………くっ！」

クーファスは額に脂汗を浮かべ苦しそうな表情をしている

徐々に闇は薄れていきついには闇の魔導書からは魔力が確認出来な
くなくなった

「ハア、ハア、ハア……………」

クーファスは膝を付きながら安堵の表情を浮かべる

しかし、突然魔導書から先程とは比べ物にならない程の魔力が溢れ出した

「おいおい…マジかよ…」

闇の魔力は魔導書を軸に回転し、圧縮し出した

「くそっ！こんな濃密な闇の魔力、大天使でも即死だぞ！」

圧縮を続ける闇の魔力

そしてそれがビー玉サイズにまで小さくなった所でまぶしい光に包まれたそれは闇の魔力から放出されたものとは思えないほど暖かく心地よい光だった

少女

状況を整理しよう

俺は闇の魔導書の封印に来た

しかし門番代わりのマンティコア相手に時間をかけすぎた
そしたら闇の魔導書は覚醒寸前

> 聖光くを使つてなんとか封印成功！

かと思つたら魔力が圧縮を始め光と共に弾けた
光が収まってから目を開けると

「なんで魔導書が無くなつて女の子が寝てんだよ……」

俺は大変困惑している

この状況はどう対処すればいいんだ？

……とりあえずあの子を起こしてどつという事が聞くしかないよな……

俺は仰向けで気持ち良さそうに寝ている女の子に近付いた

…あれ？なんかこの表現俺が変態に思われね？

女の子は14歳ぐらいで綺麗な黒髪をしている

顔は整っていて綺麗な人形のようにだ

身長は150未満かな？

ゴクッ

いや違うよ！？今のゴクッは断じてやましいことを考えていたわけ

じゃないよ!？
と、とりあえずこの子を起こさなきゃ!

「おゝい?君大丈夫?」

失礼だと思っただけどほつぺたを軽く叩いて話しかけた
つかほつぺた柔け

何か暖かい光を感じる

この何もない空間に初めて訪れた何か
それはとても暖かく、心地いい光
全てを包み込み安らぎを与えてくれる光

気持ち良い…

「おゝ……じよ……?」

何だろう?声が聞こえる誰の声だろう?

「おゝい?君大丈夫?」

私を呼んでいるの?

ぺちぺち

ん、暖かい…これは手?

目を開けてみるとそこには白い髪の少年がいた

「おっ!起きたね」

黒髪の少女は寝ぼけ眼で俺を見ている

「あつ、俺はクーファス君の名前は？」

「な……まえ？」

「うん、名前」

「私は……【鴉の翼】」

「からすの……つばさ……!？」

(【鴉の翼】って確か闇の魔導書しかもSランクの閲覧禁止厳重保管対象の最悪の災厄と呼ばれる原書じゃないかっ!)

「もしかして君は…魔導書？」

「ヤー、闇の魔導書【鴉の翼】です」

涙（前書き）

どーも今まで寡黙を貫いてきた作者すちーるうーるです？

なぜここまで寡黙を貫いてきたかと言うと……………

ぶっちやけめんどかつたんですよ（笑）

まあ、ここまで来たらもうカキコしちやえと親友のUさんに言われましてね

まあなんやかんやで出会い編のクライマックスですね

楽な姿勢で気分転換程度に見ていただけると作者的には嬉しいです
あと感想などはいつでも受け付けておりますゆえどしどしお願い致します

涙

魔導書の中には無理矢理本にされた人間がいる

力が強すぎて殺す事が出来ずだから本にして封印した人間
それを原書と呼ぶ

「本当に君は…魔導書？」

「ヤ、私は【鴉の翼】300年前に魔導書されました」

300年

300年と的確に時間が分かるのならこの少女は意識があったとい
う事だ

永い時間、本の中に閉じ込められこんな暗くて寒い所に置かれて少
女はどう思っただろう？

「……………なぜ抱き締めるのですか？」

気付いた時には目の前の少女を抱き締めていた

「なぜ…貴方は泣いているのですか？」

「寂しかったろ？」

「……………」

無言は肯定

「こんな暗くて寒い場所に300年 誰にも知られず、独りぼっち
だったんだよな？寂しかったんだよな？」

「……………ヤ」

「だったらさ、そんな寂しい目は止めてくれ」
少年は涙を止めない

「誰もお前を知らなくても俺はお前を知っている」
少年はさらに力強く抱き締める

「皆がお前を否定しても俺はお前を肯定する」
少年は少女を認める

少年の頬を伝い落ちた涙は少女の頬を伝う

「暖かい…」

これは少年の優しさなんだと少女は理解する

そして少年の暖かさに触れた少女は

「うっ、うっう あああ あああん！」

絶叫ともとれる大きな声でただ泣いた

少年はそれを無言で受け止める
時々頭を愛しそくに撫でながら

最初は同情だったのかもしれない
でもそんなことはどうでもいい
今はこの子を包み込んであげたい

この子を笑わせてあげたい

だからクーファスはこう告げる

「俺と『契約』しないか？」

涙（後書き）

至らぬ文章で申し訳ない…

誤字脱字などございましたらご指摘の程申し上げます

『契約』 結ぶ絆 (前書き)

ども

出会い編が終了です

ゆる〜く見てくださると作者的に嬉しいです

『契約』 結ぶ絆

「俺と『契約』しないか？」

俺は目の前でやっと落ち着いてきた少女にそう問いかけた

「…………『契約』ですか？」

『契約』とは契約したい対象の血と自分の血を混ぜ合わせ自分の身体に目印として塗りつけることをいう

しかし『契約』には二種類ある

1つは『同等契約』

文字通り契約対象と自分を同等の関係つまりパートナーとしての契約を結ぶ儀式だ

そしてもう1つは

「貴方は私を利用したいだけですか？」

少女は悲しそうな表情でそう言った

だいたいお察しだと思うがもう1つは『主従契約』これも文字通りだししかしこの場合は契約対象に自分の血を飲ませることで自分の魔力を対象の体内に侵入させ無理矢理命令をきかせるというサディスト御用達の契約方法だ

もちろん俺は前者の『同等契約』を言っている

「違う。俺が言っているのは『同等契約』だよ」

「……………」

少女はぱちくりと驚き

「あつ……………」

顔を赤くした

この『同等契約』は一般的にはプロポーズなどで使われる
なんたつて意味がパートナーになって下さいだからな
少女が顔を赤くしたのも頷ける

かくいう自分も顔が赤いと自覚しているのだから

「貴方…クーフアスは私のパートナーになってくれるのですか？」

「それも違う。俺はパートナーになってあげるんじゃない。君にパートナーになって欲しいんだ」

「……………あつ」

少女はまた顔を赤く染めた

やばい！この子凄く可愛いんだけどっ！

「もう一度聞くよ？俺のパートナーになってくれないか？」

「……………ヤ、私はクーフアスのパートナーになります」

「……………ありがとう」

俺は嬉しくて叫びたい衝動を必死に押し殺しながら少女に感謝の言

葉を述べた

俺が少女をパートナーにしたいと思ったのは下心からではない純粹にこの子を守りたい、側に居たい、もう二度と悲しませたくないそんな自己満足な自分の一方的な想いからである意味これは恋とも呼べるだろう

「それでは契約を…」

「ヤ…」

そして少年は少年と契りを交わす

この先どんな試練が待ち構えていても結んだ糸が決してほどけないようにと祈りながら

『契約』 結ぶ絆 (後書き)

次回からは遂に学園編！新キャラ続々登場しますよ！

あっ、でも設定とかは他の小説と被ると思いますが見放さないで下さいねー！

『忘却の図書館』に暖かな光とともに契約の詩が紡がれる

「血と血を交え繋がりを持ち同等の関係をここに結ぶ」

「ヤ、契約に応え契りを結ぶ事に同意します」

「では血を……」

二人は親指を歯で噛み血を出す

そして血が溢れ出る親指を重ねる

刹那、淡い光が放たれた

「契約は成された。我、クーファス・ツヴァルトこの命続く限り隣にいることを誓う」

「ヤ、同じく【鴉の翼】誓いに応えます」

淡い光は二人を包み静かに消えた

光が収まったクーファスの首には先ほどまで無かった黒のチョーカーが【鴉の翼】の人差し指には白のリングがはめられていた

「んー、これが契約の証ってやつか」

クーファスは見ることの出来ないチョーカーを指でなぞった

「……………」

「ん、どうした？」

「…なんでクーファスはリングじゃないんですか？」

「…はい？」

「普通パートナーになるんだったらリングというのが相場だと思います」

（ああ、乙女チックで可愛い事言うなあ…）

「…！？か、可愛いとか今言つの反則です…」

「あ、ごめ…もしかして声に出てた？」

「…ヤ」

（やっちまった…キモいな俺…でも照れてる顔も可愛いなあ…）

「じゃ、じゃあこれからアルテミス学園ってところに行くよ………」

「…どうしんですか？クーファス」

「そーいや名前は？」

「…私の名前は魔導書にされた時から【鴉の翼】です」

「…………ん、ならお前は今日からクロだ」

「ク…ロ？」

「そ、クロだ。ほら俺って髪が白いだろ？それに対するようにお前の髪は黒い。二人で一つの白と黒って意味でクロ。」

「クロ…私の名前…クーファスと二人で一つ…嬉しいです」

「気に入ってくれて良かったよ」

「あの…クーファスの事をクーと呼んでいいですか？」

「ん、いいよ」

「ありがとうござ…」

フラッシュ

「っ！クロ大丈夫かつ！」

「ヤ、大丈夫です。少し疲れただけですから」

「そっか…良かった。なら早く休んだほうがいいな今からアルテミス学園って所に行くからそこで休もう。立てるか？」

「すみません。ちょっと無理です…」

「ん、気にすんな。立ててもおぶっていくつもりだったしな」

「あっ、おぶっていきならしい方法があります」

「ん？何…わっ！？」

突然クロの体が光出したかと思えばクロの姿が消え代わりに…

めんどろなおっさん

俺たちは今アルテミス学園の前にいる
ちなみにクロはネコになって俺の頭の上にいる
それにしても……

「…でかすぎじゃね？」

「ヤ、大きいです」

いやマジでかいっす
どんくらいかって？

城だよ城！キヤッスル！

「森の入り口からは見えないってことは結界かなんか張ってんのか」

「ヤ、学園周辺に巨大な魔方陣を確認しました」

クロさん凄くね？

「クー、そんなに誉めないでください」

おおっ、クロニヤンが照れてる！頭の上でお腹を擦ってくるっ！

「クー、恥ずかしいです」

かーいーよお！お持ちk…ハッ！いかんいかん！
脱線するところだった

「とりあえず中に入ろう。」

理事長に会わなきゃいけないしクロの事も説明しなきゃだしな」

「ヤ、了解です」

「そんじゃあ行くかな」

クーファスはネコになったクロを頭に乗せ学園の正門に足を向けた

「うわあ、正門もでつかいなあ……」

「さてさて、んじゃ行きますかね」

「おい！そこのお前！」

正門をくぐるうとする軽鎧を着けた騎士のようなおっさんが近付いてきた

「ん？なんすか？」

「お前、ここの生徒か？」

「はい、そうですけど何か用ですか？」

「ふん、嘘を吐くなよ小僧私はこの学園の警備騎士をしている者だがお前のようなガキは見たことない！あらかた制服を着て侵入しようとする低脳な賊だろ？さっさと仲間の居場所を吐くなら痛い目見なくて済むぞ」

「ハア…俺の嫌いなタイプ第三位のやつだな
人の話も聞かないで自己完結するバカか…」

「…失礼、紹介が遅れました。私は今日からアルテミス学園1年7組に所属することになりましたクーファス・ツヴァルトという者でございます。急な配属で自分を証明するものは持ち合わせていませんが理事長…アイラ・クルソンフィードから連絡がいつてるはずですが？」

「確かに理事長からの連絡を受けているがもつと早く到着する予定だったのだが？」

「すみません。個人的な急用が出来てしまい到着時刻に遅れてしまいました」

「ふん、これだから嘘の下手なガキは！だれがそんな安っぽい嘘に騙されるか！さっさと仲間の居場所を吐け！」

カッチーン

「……さっきから下手に出てりゃ調子に乗りやがって！さっさと入れるってんだよ！」

キレたよ

うんキレた

だってこいつ何言ってもこの調子だぜ？

イラつくよね？

クーちゃん怒りゲージ20%越えなり！

「はっ！ついに正体現したか賊が！この私、レリップ・エントラが成敗してくれるわ！」

レリップ…やっぱりおっさんでいいや

おっさんは腰に差してる剣を抜き斬りかかってきた

「でああああ！」

……何て言うか遅いな

どうせ貴族のコネなんか使って騎士団に入ったクソだな

アイラに警備騎士団の見直し要求と…

さて気絶させるかな…

おっさんは振り返って剣を叩きつけてくる

俺はそれを軽くかわして顎に手刀をかすらせた

まっ、気絶させるなら脳を揺らすのが手っ取り早いからね

「弱っ、こんなんで学園警備が務まんのかよ……とゆうわけで見直し要求だぞ…アイラ」

俺は先ほどから後ろで面白そうに見物していた20代ほどの金髪の美女、学園理事長アイラ・クルソンフィードに声をかけた

「だって、クーちゃんの実力を知りたくてね〜まあそのアホじゃ相手にもならなかったわね。でも安心なさい。貴族のおこぼれ騎士団よ。正式な学園騎士団は別にいるわ」

「たくっ、さっさと止めるよな」

「遅れてくるクーちゃんが悪いんでしょう？…まあ、そこにいる黒ネコちゃんを連れてくるとは思わなかったけどね？」

「！？…クー……」

「安心しろクオ。こいつは味方だよ。それに初見でお前の正体に気

付く奴はこいつぐらいだ」

「あらお姉さん相手にこいつとは偉くなったものね？『白の吸血姫』」
「？」

「その名で呼ぶな……」

「冗談よ。では立ち話もなんだし私の部屋に行きましょつか……よ
うこそクーファス、クロちゃん。アルテミス学園へ」

そう言ってアイラはニコリと笑った

少女の想い 白紙の手帳

初めて好きな人が出来た

好きな人は白い髪、紅と黒のオツドアイに綺麗な顔つきをしていた

名前はクーファス

彼は皆に疎まれ親にも捨てられた私に人の暖かさを教えてくれた

私のために涙を流してくれた

一生側に居てくれると誓ってくれた

名前を与えてくれた

ク口 彼の髪の色に対する自分の黒髪にちなんだ名前

彼の事を愛称で呼んだ

彼との距離が縮んだ気がした

『クー』

少しクールな彼には似合わない可愛いあだ名

ただそれさえも愛しい

『クー』

なぜ名前を呼ぶだけでこんなに胸が弾むのだろう

契約をしたオプシヨンなのか彼の心の声が聞こえた

『可愛い』

そう言ってくれた

心の声だからそれに嘘偽りのないということが感じられた

私は彼の事をまだ知らない

でもそれでいい

これから彼の…クーの事を知ることができる

私とクーの絆という手帳はまだ白紙だ

でもこれからはそこに色んなことを書き込んでいける
今日だって彼への想いを書き込んだ

隣を歩くクーを見つめていると目が合った

目が合った瞬間クーは微笑んで手を握ってくれた私もそれに応えて
握り返す

二人で書き込む手帳を失くさないようにぎゅっと強く

アルテミス学園

「確認のために言うけどクーちゃんが転入するのは1年7組よ」

俺たちは今アイラの執務室、つまり理事長室にいる

ちなみにクロは人型になって俺の膝の上に座っている

なんで膝の上に座っているかって？ だってここじゃないと座らな
いって言うんだもん！

クロは意外と駄々っ子だったよ…

でもクロの身長が140ほどしかないから170ちよつとの俺にす
っぽり入るんだよね

え？自慢かって？

うん自慢だぜ！

おっと脱線してたな

アルテミス学園は1学年7クラスまである

俺が転入するのは1年7組だそうだ

クラスは各個人のレベルを一定に揃えるから特に1組が強くて7組
が弱いとかではない

「ちなみに授業内容は知ってるわよね？」

アルテミス学園は《狩人》育成に主をおいた学園だが《狩人》にな
るにしても一般的な教養は受ける

午前中は歴史や数学などといった一般教養と魔法学、薬学などとい
った育成学園ならではの授業もある

そして午後からはこの学園にある『学園ギルド』と呼ばれる場所で

クエストを受けるもよし、学科と呼ばれる教室で自分にあつた戦い方を学ぶもよしだ

基本的に午後は自由な時間だがさぼっていると単位を貰えずに留年となる

単位を手っ取り早く貯めるにはクエストが一番だ単位を貯めた分だけ休むことができるから生徒の多くはクエストを受けるそうだがクエストは実戦

下手すりゃ死ぬ

実際にこの学園では年間死者を出している

だがクエストは自己責任なので学園に被害はないそうだ

後は

「クラスクエストについてはちゃんと覚えときなさいね」

そうクラスクエストだ

文字通りのクラス全員で挑むクエストだ

これは強制である

なぜ強制かと言うと、過去の学園はクエストを受けずとも卒業出来たらしいのだが実戦も知らぬ新人が魔物と戦えるわけがないというわけで数ヶ月に1回強制的にクエストを受けさせ実戦経験を積ませるというわけだ

ちなみにクラスクエストは通常クエストよりランクが高いものを受けさせる

もちろん絶対に無理というクエストは受けさせない

しかしイレギュラーというものは必ずあるもので過去のクラスクエ

ストでランクDのトルマリネス（体長4mほどの大猿）の討伐中に
ランクBのアルカネオ（体長1.5mほどのドラゴンの下位種）が乱
入し壊滅するというイレギュラーがあったらしい

アルカネオは学園警護騎士団により討伐されたらしい

ちなみに学園警護騎士団とは学園が指定したクエストを受けて成功
させた者に与えられる称号>ナンバーズ<の集まりだ

>ナンバーズ<の称号があれば卒業は確定でしかも王国騎士団へと
入ることが許されるため生徒の憧れなのだそうだ

あつ、あと卒業の単位はCランクになることだ

ランクはSS、S、AA、A、B、C、D、Fの八段階がある

入学当初は勿論Fランク進学単位は一年でワンランク上げること

一般的に一人前とされるランクがCなのでこの学園のナンバーズは
相当な実力者ということになる

とまあだいたい覚えているのはこのあたりかな？

「ん、それだけ覚えていればバッチリよ。知らないことは後で先生
に聞きなさい」

とアイラから人差し指と親指で作ったオーケーサインをもらう

「さて、それでは貴方をこの学園に呼んだ理由を教えましょうか
ね」

真面目な表情をしたアイラがそう切り出してきた

ハーレム？なにそれ？美味しいの？

「ハーレムを作りなさい」

わーお

「ハーレムを作りなさい」

えっ？何で2回言ったの？大事なことなの？

「……………マジで？」

「レイトからのお願いなのよ」

レイト・ツヴァルト

まあ、俺の親父

俺みたいなダンピールではなく純血のヴァンパイア

ここで少しだけ説明をしよう

ヴァンパイアという種族は個体数が少ない

それはヴァンパイアの女性があまり生まれなからだからだ
なのでヴァンパイアは他種族と交わり種を繋いできた

だがヴァンパイアの血は薄く他種族の血が必然的に濃くなる
なのでダンピールとしての能力すら持たない子が多く生まれる

しかし俺のようにヴァンパイアの血が濃いやつも生まれる

ダンピールはヴァンパイアの血が流れているためヴァンパイアに限り無く近いがヴァンパイアではない

女性が生まれにくくなおかつ血が薄いヴァンパイアは1つの結論に辿り着いた

ダンピールが生まれなければたくさん女作って頑張るしかないじゃん

まあ、そんなわけでハーレム制度が出来たわけだ

「んでこの学園は男女比率が3：7だからハーレム作るのに持ってこいってわけなのよ」

由緒あるアルテミス学園の理事長がこんなだからなあ…

「なあ、アイ…」

「昔みたいにお母さんって呼んでよ〜」

「……………クー、どういふ事ですか?」

「ああ、実はアイ」お母さん「…母さんも親父のハーレムの一員なんだ…」

「では母さんって言うのは?」

「ああ、俺には兄弟……………まあ血は半分しか繋がってないけど兄弟がいるんだ姉さん2人、妹1人……………そして双子の兄が1人…」

「クー?」

兄の事を語るときクーファスは辛そうな顔をした

「なんでもない…まあ、昔はみんな一緒に暮らしてて俺たち子供はそれぞれの母親をまとめて母さんって呼んでたんだよ」

「ヤ、納得しました」

「話を戻してもいいかな？クーちゃん」

「ああ」

「では…クーちゃんたちの住む場所は寮とは別に一戸建てのどこを用意したからそこを使って頂戴ねハーレムメンバーが出来たら私に連絡をとって、その子をそっちに引っ越しさせるから」

「マジでハーレム作らせる気？別に俺じゃなくても姉ちゃん達に…」

「ちなみにあの子達もハーレムメンバーを希望しているわ」

マジかつ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4476x/>

不完全なヴァンパイアと魔導書の少女

2011年11月17日22時44分発行